マキアヴェリズム

西村貞二

REGULUS LIBRARY

マキアヴェリズム

西村貞二

西村貞二（にしむら・ていじ）

1913年　京都に生まれる。
1937年　東京大学西洋史学科卒業。
現　在　東北大学名誉教授，文学博士。
著　書　『教養としての世界史』（講談社），『神の国から地上の国へ』（文藝春秋），『マキアヴェリ―その思想と人間像』（講談社），『レオナルド・ダ・ヴィンチ』（清水書院），『現代ドイツの歴史学』（未来社），『歴史から何を学ぶか』（講談社），『現代ヨーロッパの歴史家』（創文社），『歴史観とは何か』（第三文明社）など。

マキアヴェリズム　　レグルス文庫 101

1978年9月30日　初版第1刷発行

著者©　西村貞二
発行者　栗生一郎
装幀者　栃折久美子
発行所　株式会社　第三文明社
東京都千代田区猿楽町 2―5―4
郵便番号　101　電話 03（294）8731（代）
振替口座　東京 5-117823

印刷所　明和印刷株式会社

（落丁本・乱丁本はおとりかえします）　0220―1101―4438

まえがき

マキアヴェリとの出会いは、私にとって運命だったような気がする。運命などと笑止千万にきこえようが、告白すれば、こういう次第である。

西洋史学科にはいって、わりとはやくルネサンス史に興味をもった。あれこれ参考書をよみ漁ったものの、テーマをつかみかねた。そうした折、ディルタイの精神史の名著『十五、六世紀における人間の把握と分析』で「マキアヴェリは政治的天才と経験とによって、一個の世界的な力となった」という句に遇ったとたん、啓示のようにひらめくものがあった。それで卒論のテーマはきまったようなものだった。卒業いらいかきためたマキアヴェリ論攷を、マキアヴェリの生誕五百年を記念して一書にまとめた(『マキアヴェリ――その思想と人間像』一九六九、講談社)。一段落ついたと思っていたら、マキアヴェリのことが脳裡を去らない。べつのテーマに気をとられたりしていると、夢枕にマキアヴェリさんが立って、「オイ、どうした、ちかごろとんとご無沙汰だね」と、皮肉たっぷりに督促するしまつだ。ハッとしてまた

マキアヴェリにもどる。そういう即かず離れずの状態がここ十年らいつづいている。

たまたま当文庫からマキアヴェリについてかくようにもとめられた。全体像はひととおり前著にかいたので、本書では「マキアヴェリズム」に焦点を合わせることにした。それにしても、マキアヴェリズムはなんという大きな問題であろうか。マイネッケが「国家理性とマキアヴェリズムは、時間をこえた、普遍人間的な現象である。しかしそれらは、特定の局面と、それにかかりやすい素質をもっている特定の諸民族のなかでは、濃くなり、とつぜん力強く伸びるものである」(『ドイツの悲劇』一九四六、矢田俊隆訳)といっている。「時間をこえた、普遍人間的な現象」とは、およそ政治の劇がえんじられるところではどこでも見いだされるということだ。いったい、マキアヴェリズムはどのような論理をもつのだろうか。「特定の局面と特定の諸民族」とは、マキアヴェリズムが時間をこえた、普遍人間的な現象である一方、その時その時、あの民族この民族において、ちがった現われ方をするということだ。いったい、マキアヴェリズムはどのような生理を——時には病理をしめすのだろうか。こうしてマキアヴェリズムの論理と生理を追求することが、本書がめざした第一点である。

ところで、今までに目をとおしたマキアヴェリ論のなかでもっとも感銘をうけたのは、歴史家のでも政治学者のでもなくて一詩人の批評だといったら、ひとは意外とするかもしれな

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

い。ノーベル文学賞受賞者T・S・エリオットは、マキアヴェリの死没四百年にさいしてこう述べた。「マキアヴェリの名声の歴史ほど、影響力というものが詰らない的はずれのものであることをよく示した歴史はなかった。彼ほどにかくも完膚なきまでに誤解された偉人は稀である。彼は常に曲解されている」(『異神を追いて』中橋一夫訳)。いうとおりだ。たとえば、十六世紀に『君主論』はローマ教皇によって禁書目録にのせられた。シェイクスピアは「殺人的マキアヴェリ」とよんだ。十七世紀にイェズイタ派はこぞって反駁した。聖バルテルミーの夜の新教徒虐殺の責任を『君主論』に帰したジャンティユのような者もいる。プロイセンのフリードリヒ大王は「この世に普及した本のなかでもっとも危険だ」と弾劾した。かと思うと、十八世紀末にルソーは『社会契約論』で「マキアヴェリは国王に教えるふりをして人民に重大な教訓をあたえた。『君主論』は共和派の宝典だ」と礼賛した。十九世紀のドイツでは一転して愛国者の書にまつりあげられ、イタリアでは「神聖なマキアヴェリ」とまでいわれた。近くはヒトラーは枕頭の書とした。いずれも手前勝手な解釈である。だが、そういう解釈にかえって時代のすがたがうつっていないか。マキアヴェリは時代をうつす鏡なのである。そうした誤解からマキアヴェリ像を洗いきよめ、悪名たかいマキアヴェリズムの創始者という冤罪をそそぐことが、本書がめざした第二点である。

とはいえ、第一点についても第二点についても、駆け足で論じるほかなかった。そのため

に読者諸氏に考えるヒントしか提供できなかったのではないかとおそれる。旧稿二篇を加えたのは、マキアヴェリの思想がマキアヴェリズムにつきないことを知っていただきたかったからである。

一九七八年八月

西村貞二

目次

まえがき
マキアヴェリズム——その論理と生理 …… 7
序　マキアヴェリズムとは何か …… 9
I　マキアヴェリズムの先駆 …… 21
(1) 古典古代 21
(2) キリスト教的中世 34
II　マキアヴェリの時代と思想 …… 47
(1) ルネサンス時代 47
(2) 行動 59
(3) 思想 66

Ⅲ　マキアヴェリズムの展開……85
(1)　宗教改革時代　85
(2)　絶対主義時代　113
(3)　十九世紀　124
(4)　現代　134
結　語　マキアヴェリズムの反省……154
マキアヴェリの歴史観……163
Ⅰ　マキアヴェリにおける“fortuna”……165
Ⅱ　マキアヴェリの“necessità”概念……191
参考文献

マキアヴェリズム

——その論理と生理

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

序　マキアヴェリズムとは何か

政治と道徳

『政治学事典』（平凡社）にあたってみると、とうぜんのことだが、「政治」にかんする項目がたいへん多い。政治意識、政治運動、政治家、政治革命、等々。関連項目を丹念にさがしたら、数えきれないだろう。現代では、個人の生活でも政治と深くかつ広くかかわっている。政治にかんする項目が多いのは、現代がすぐれて政治的な時代である証左なのだ。政治学はこれらの諸項目を直接に学問的認識の対象とする。もちろん、政治学は歴史学と緊密な関係をもつ。政治運動とか政治革命は、歴史知識を欠くことができない。それがいかに発生し展開したかを考察するには、歴史学の補助を要する。他方、歴史学においても、古来、政治は大きな比重をしめてきた。しかしせまい意味での政治現象は、政治学者の研究にゆだねるのが通例であろう。

ひるがえって道徳の場合は、どうか。『哲学事典』（平凡社）によると、「政治」ほど多くは

ないけれども、道徳教育、道徳社会学、道徳主義、道徳哲学などがあり、ほぼ同義で人倫とか徳とか倫理という語が用いられる。政治と同じく、道徳とか倫理も歴史学と没交渉ではない。プラトン（前四二七―前三四七）やアリストテレス（前三八四―前三二二）の倫理学は、ギリシアの歴史を知ることなしにどうして正しい理解がえられようか。そもそも道徳とか倫理も、万古不易ではなくて歴史とともに変わる。早いはなし、かつて封建時代に美徳とされたものが、こんにち必ずしも美徳とされないではないか。なぜそうなったかは歴史的な問題である。だが倫理学固有の項目は、やはり倫理学者にまかせるのが通例であろう。

ところが「政治と道徳」になると、事情がちがってくる。政治学と倫理学との両方にまたがっているから、どちらかにまかせきりというわけに参らない。「政治と道徳」の関係がはっきりしているようではっきりしないのは、両方にまたがっているせいもあろう。どの点までがはっきりしているのか。周知のように、トライチュケ（一八三四―九六）はプロイセンによるドイツ統一をさけんだ歴史家である。彼は「われわれが国家を倫理的共同体としてとらえるならば、国家は疑いもなく普遍的道徳律のもとに立たなければならない」（『政治学』遺著、一八九七）と述べている。権力政治を謳歌したトライチュケすら、表むきは国家を倫理的共同体という。道徳など眼中におかぬ、たんなる強制的権力機構だとはいわない。政治は道徳をはなれて存しえない、政治の大義名分を根拠づけるのは道徳のほかにないとは、口がすっぱ

くなるくらい説かれたものだ。正義とよばれようと社会的公正とよばれようと、公共の福祉とよばれようと人民の安寧とよばれようと、なんらかの道徳的なものの実現を建前としない政治はあるまい。戦争ですらも、正義のための、あるいは世界平和のための戦争ということで正当化される。

道徳とか倫理ときくと、まず個人道徳を思いうかべる。たいていの倫理学概論は、義務とか責任とか徳論といった個人道徳から筆をおこすのがつねだ。だが、道徳はもともと社会における成員相互の関係をさだめる規範である。社会や集団のなかでおこなわれるのである。「道徳というものの成り立つ生活的基底に、各自的な主我性と社会的共同性の関わり合いの事態がある」（三宅剛一『道徳の哲学』）。政治にしたって同じだ。人間が自分一個に権力をふるうことはないわけで、人間集団を支配したり、他人に優越した地位に立つときはじめて生じる。この社会や集団を国家にまでひろげてみたまえ。国家相互の関係を律する国際法というものがつくられる。国際法の根底にあるのも普遍的な原則であって、正義はそうした原則のひとつである。「強い者勝ち」「勝てば官軍」を是認するような国際法は存在するはずがない。国家間に紛争がおこったとき、国際司法裁判所にかけてなるべく平和裡に処理しようとしたり、両国の仲介者の役をえんじる。実効はべつとして、国家も道義をかえりみないということはゆるされない。

そうはいうものの、世のなかの物ごとで建前と本音とが一致しないように、現実の政治行動はつねに道義を顧慮するとは限らない。いや、それから離反したり対立する。トライチュケが「国家は疑いもなく普遍的道徳律のもとに立たなければならない」といった尻から、「だがひとはだれしも政治と道徳との矛盾について語る。この一般的現象はすでに、如上の関係がそう簡単明瞭でないことをしめす」というのは、まさに語るに落ちたものだ。政治は道徳にしたがうべきである。が、じっさいはしたがわない場合がある。国際政治でも大国がほとんどつねに優位に立つ。弱国や小国は見殺しにされる。大国の国家的利益の追求が世界平和と矛盾をきたすことは、衆目のみるところではなかろうか。ここに「政治と道徳」の不明瞭な、というよりやっかいな関係がある。なぜ、政治は現実においてしばしば道徳から離反したり対立するのだろうか。つぎの事情を考えていただきたい。政治は多かれ少なかれ権力の裏づけを必要とする。権力をもたない政治はない、といっても過言ではない。政治権力とか権力政治といったことばが端的にしめしている。

この点についてバートランド・ラッセル（一八七二―一九七〇）が『権力――その歴史と心理』（一九三八、東宮隆訳）で犀利な分析をこころみた。ラッセルによれば、権力が社会科学の根本概念をなすのは、あたかもエネルギーが物理学の根本概念をなすのと同じである。権力に多種多様な形がある点でもエネルギーに似ている。権力は、僧侶の権力といった宗教的な

あらわれ方をすることもあれば、王権としてあらわれることもある。むきだしの権力もあれば革命的権力もあり、軍事的権力も経済的権力もある。このように形態はさまざまだが、とにかく根本に権力がある。その意味で、社会力学の法則は権力によってはじめて十分に論じることができる。現今ではかつて大きな意義をもっていた僧侶の権力とか王の権力などは力をうしなってしまった。これに反して政治権力は大きな、ますます大きな意義をもってきている。ところが困ったことに、一般に権力というもの、とくに政治権力は、自己を拡大しようとする衝動にかられる。動物の欲望には限りがあって、生存や生殖のギリギリの必要にせまられて活動するけれど、必要がみたされると、もうそれ以上にもとめようとはしない。しかるに人間の欲望には限りがなく、必要がみたされてもなおかつ活動をやめない。そういう果てしない欲望のなかでも目だつのが、権力と栄光にたいする欲望である。権力をえたものは、持てる権力だけで満足せず、いっそう大きな権力をえようとする。そのために多くの人間を支配しようとし、そこから害悪が生じる。

こうしたラッセルの分析は一見常識的だが、深い英知をたたえている。古今東西の歴史にてらして、権力者もいつかは権力をうしなった。うしなうだけならいいが、身をほろぼした。身をほろぼすもとだと百も承知しながら、現在ただ今も、人間は権力をもとめてやまない。それほど権力欲は根が深い。そうしたとき、えてして権力欲は道徳の制限をこえる。それと

いうのも、権力欲は衝動的で非合理的なものだからである。普遍的道徳律というからには、だれもが納得する合理性がある。権力欲という非合理的なものが普遍的道徳律における合理的なものを、ふみにじったり破壊するのである。じっさい、権力は暴力的といってもよいくらいにおそるべき強制力をもっていて、人間の自由を束縛し、幸福をじゅうりんして平気の平左だ。だからこうした権力に警戒したひとは少なくない。ブルクハルト（一八一八—九七）という歴史家は、「権力それじしんは悪だ」といっている。そうきめつけないまでも、十九世紀イギリスの自由主義的マンチェスター派などは、国家を「必要悪」として、国家権力のおよぶ範囲を最小限にとどめようとした。ともあれ、このように政治は道徳にしたがうべしという建前が、あるところの現実に屈服する。「政治と道徳」の関係はまことに問題的といわなければならない。

マキアヴェリズムとは何か

しかしこの関係を解きほごすすべがないわけではない。「政治と道徳」をたんに政治学から、あるいはたんに倫理学からとらえるのではなくて、歴史的にとらえることで、私が本書でこころみるのはそのことである。ところで「政治と道徳」の関係を解決しようとしたのがマキアヴェリである。イタリア・ルネサンス末期にあらわれた政治思想家であって、「マキアヴェ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com